A Different Type of Champion

＜違ったタイプのチャンピオン＞

グレッグ･モラン

人がテニスを教えるのには、いろいろな理由があります。次のチャンピオンを育てるためであったり、選手として活躍してきた人たちは、自分が愛するテニスに関わり続けるためであったり、また、私も含めた大多数は、テニスを支えているレクリエーションとしてのテニスをしている人たちに指導をする喜びのためであったりします。お互いの人間関係を大切にして、彼らのレベルを上げる手助けをしています。

そして、リズ･オデラのような例もあります。

2002年にPTRのメンバーとなった彼女は、ケニアのナイロビ郊外の小さな町で10年も前のラケットとフェルトが無くなってただのゴムボールとなったテニスボールを使って、大勢の子供たちにテニスを教えているだけでなく、彼らの人生を変えています。

ケニア出身の優れたプレーヤーであった彼女は、プロとして10年間トーナメントを回りましたが、それ以上続けるためのスポンサーを見つけることができずに1986年に引退し、学業に専念しました。そして、スポーツ科学、免疫学、寄生虫学、教育学を修了しました。

教育を受けることは彼女の情熱の表れでしたが、オデラ博士は子供達のために活動することを召命（神のお告げ）と受け止めています。「私は近所の人からいただいたラケットで9才からテニスを始めました。以来、テニスは私の人生に多くのものをもたらしてくれました。私は、同じようなことを子供たちにしてあげられたらと思っています。」

彼女は、恵まれない子供たちが教育を受けながら運動能力を伸ばし、ゆくゆくは大学へのスカラーシップに繋がるようなアカデミーを立ち上げたいという大きな夢を持っていました。彼女の教える『スポーツ＋教育＝成功』という公式は、決して目新しいものではありませんでしたが、多くの障害に直面しました。まず第一の障害はアカデミーを建てるための土地と資金を調達することでしたが、望み通りではなかったものの、やがて、ナイロビ郊外に購入可能な小さな土地を探し当てました。

彼女は回想します。「そこは、湿地でありゴミ捨て場でした。夫のジムは私の頭がおかしくなったのではと思いました。土地は水場との高低差が殆ど無く、下水設備も整っていませんでしたから、そこで生活ができると考える人は誰もいませんでした。」

彼女は、持ち前の説得力で夫を説き伏せました。「間もなく夫は私の考えの虜になりました。彼は建築家だったので、彼の能力をアカデミー建設のために使い、私は子供たちのことに全力を注ぐことができました。」

夫妻は貯えを土地の購入に充て、そこをサディリ･オーバルと名付けました。「サディリ」はスワヒリ語で「健康」を意味し、「オーバル」はその土地の形状が「長円形」をしていたことに由来します。

リズの展望で不可欠な要素の2番目は「教育」でした。「子供たちがテニスを通じて運動能力を高めるだけでは不十分です。人生で成功するためには心も育たなければなりません。」と彼女は言います。そこで、サディリ･オーバルは近くにある就学前の子供から高校生までを扱うマレジスクールと手を組みました。

様々なことを整えつつ建設が進行する中、彼女は手製の木のラケットとゴムボールを使って、駐車場でテニスを教え始めました。生徒は、近くにあるアフリカ最大のスラムであるキベラの子供たちでした。

キベラという町は地図には載っていません。政府はその存在を公表したくないのです。キベラの面積はニューヨークのセントラルパークとほぼ同じ1.5平方マイル（3.6平方キロ）ですが、その中に120万人もの人が生活しており、人口密度はニューヨーク市の30倍です。キベラには多層階の建物はなく、毎年新たに10,000人が流入してくると言われています。

家屋は掘っ立て小屋で、木ぎれや板を泥で塗り固めたり、マバティと呼ばれる波板のトタン板で作られています。屋根は全てマバティです。ベッドマットで間仕切りされて2部屋ある家もありますが、1部屋の広さは1.9平方メートルくらいです。それぞれの家には、少なくて2人、多くて12人近い人々が生活しています。

町には水道も電気も、学校も病院もありません。道路にはゴミが散乱し、多くは道ばたに積み上げられ、コンドルやジャッカルや山羊の棲み家となっています。これ以上の汚染はないという状態です。衛生設備がありませんから、スラムは人間と動物の排泄物で汚れきっています。およそ300人が穴を掘っただけのトイレを共同使用していますが、その他は「空飛ぶトイレ」と呼ばれるプラスティックの袋に入れて、道ばたに放置されたり、あるいは、単にできるだけ遠くに投げ捨てられています。

そんな衛生環境に加えて栄養不足もあり、病気が蔓延しやすい状態です。キベラに住む大人の約15%はエイズに感染しており、その結果50,000人もの子供たちが孤児となっています。彼らは祖父母に育てられたり、定員を遙かに超えた孤児院で生活したり、あるいは、身よりもなく一人で生活をしています。これ以上悪くなりようがありません。

リズは、そういった子供たちをキベラからサディリに呼んでいます。徒歩20分の距離に何百人という子供たちがおり、サディリに収容できる人数には限度がある訳で、どのようにして彼らの中から選んでいるのでしょうか。

リズが言うには、「私たちは、3つの基本原則を理解できる子供たちを選んでいます。まず、良い将来を望むのであれば、学校に通って一生懸命勉強すること。次に、テニスをすることでいろいろなスキルを覚えることができ、健康になること。そして、テニスをすることで自分の地域のリーダーとなる責任が伴い、それは、まず自己管理から始まり、学校や家のことを気遣うことから始まるということ。この3つです。」

子供たちの非識字率は高く、栄養不足で、生活環境から感情も傷ついていますが、熱心です。

「彼らは全くゼロからスタートしています。ですから、新しい事物に飢えており、何でも掴み取り学ぼうとしています。彼らは、テニスができて教育が受けられることをこの上ない名誉と思っていますから、彼らの集中力はレーザーのようです。朝早くからやってきて、プログラムが終わるまでここにいる訳ですが、常に本当にポジティブで、言われたことは何でもやろうとしています。そういった彼らを見ていると、コートでも教室でも彼らから最高のものを引き出せるという確信が持てます。」

最近、妻のケリーとサディリ・オーバルを訪れて、リズと子供たちに接する機会がありました。その現場を初めて見た時の感情は、ショック以外の何物でもありませんでした。ティーチングプロとしての観点と、コネチカットの恵まれた環境の中で、一度に携わる生徒の数の少なさと、ボールカゴの中の豊富なボールの量に慣れていたからです。彼女のプログラムでは、1面に平均10〜12人の子供たちがいるのに対して、運が良くてもボールホッパー１カゴ分のボールしかありませんでした。ボールの量だけに限らず、ボールの状態も、ボール遊びが好きな犬でさえそれでは遊ばないだろうというレベルです。子供たちはいつもフェルトの無いボールで練習しているのです。

5面あるコートは、基金を集めたり募金などで数年前に改修しましたが、決して良い状態とはいえません。サディリ・オーバルとキベラは本当に近い距離にあるので、ネットは毎日の練習が終わったら片付けなければなりません。忘れてしまうと、翌朝には無くなっています。アカデミーの全ての出入り口は、夜間は施錠されます。

雨が降っても練習には影響しませんが、水掃きのための道具はありません。生徒とコーチは一緒になって、２枚しかない毛布を引きずってコートから水気が無くなるまで動き回ります。水で濡れて足場が悪いコートでクリニックを行ったことは一度だけではありませんでした。事実、雨が降りしきる中、120人の子供たちのクリニックを校舎の屋上でやったくらいです。

子供たちは心身共に健康な状態にありますが、靴がない子やラケットのない子が殆どで、最後の食事をしたのがいつだったかを覚えていない子すらいます。現地では栄養不足が最大の問題で、子供たちの多くは標準よりも小柄です。アカデミーでの初日に、ケリーと私は一人の女の子のプレーに見とれていました。背格好からして11～2才だとばかり思っていましたが、何と18才だったと聞かされた時はショックでした。栄養不足から、身体がきちんと成長していなかったのです。

いろいろなことがありますが、リズのプログラムは成果を上げています。

サディリ・オーバルの環境は確かに厳しいものですが、彼女は「だから何なの。人生は大変なものなのよ。」と言い切ります。言い訳を言うことは許されておらず、その結果、プログラムからレベルの高いプレーヤーが育っているだけでなく、人間的にも素晴らしい子供たちが育っています。

「毎日、練習の都度、普通埋めることが難しいギャップを埋めるにはどうしたらよいかという、生きるための術を教えています。それらは、身体を清潔にすること、コミュニケーションスキル、読書、学習の習慣と英会話です。練習に来る時は読む本を持ってくることと、宿題を終わらせていなければいけません。また、年上の子たちには年下の子たちの面倒を見させるようにして、不慣れなことや問題点を解決する手助けをさせています。

こうした仲間同士の互助精神は、コート上でも役に立っています。1面に最大15人はいるので、練習の人数とレベルが均等にならないことがよくありますが、問題ありません。上手な子がそうでない子と練習するときには、力をセーブして先生のようになって彼らの練習になるようにしています。「全員が全員のために働くことも我々のプログラムの一部です。」とリズは言います。

環境に関心を持たせることも、彼女の学校の個人教育の一環です。「アフリカで生きて行くためには、環境は大切にしなければなりません。我々の大部分が農業で生計を営んでいる訳ですから、天変地異が起きたら生きてはいけません。自分たちが生きて行くために環境に対する意識を高め、子供たちにはどこに住もうと周囲の環境を改善することを心がけてもらいたいと思っています。スポーツができるということには責任が伴うと言い聞かせています。周囲を見回して、『何かもっと良くすることはできないだろうか。物を捨てるのではなく、リサイクルすることはできないだろうか。どうしたら環境保護ができるだろうか。』と自問してみましょう。こういった考え方を子供の頃に植え付けることができれば、将来、環境を大切にする大人になるでしょう。」

プログラムが始まって20年。7,000名以上の子供たちが参加し、その90％が、彼女がスラム内の状態の改善に尽力してきているキベラからの子供たちです。彼女はいつもそこにいて、教え子たちの家を訪ね、必要に応じて生活に必要な物を提供したり、医療補助をしています。彼女は、毎週小さな空き地でテニスクリニックをしており、ゆくゆくはそのエリアに2面のコートを造りたいと思っています。

サディリ・オーバルに来た子供たちの70%はプログラムを終了しています。それは、アメリカの高校卒業と同程度のレベルで、彼らの環境からしてみればとても素晴らしい成果です。その中から、大学のスカラーシップを得た子供たちもいます。

2009年にアフリカのナンバーワンになったンシミニマナ・サキナもその一人で、素晴らしい人間性を持ち、スケールの大きなテニスをする美しい女の子です。彼女は「サディリでは、テニスと人生について教わりました。リズは私たち姉妹をスラムの悲運から救ってくれました。」と言っています。彼女は、来年、大学への進学を目指しています。

東アフリカのトップランクプレーヤーのアジザ・ブトイーは、「サディリでは、テニスだけでなく、異なった文化や人種の人たちと共存することを教えてくれました。」と言います。彼女は、昨年、セレナ・ウィリアムスがサディリを訪れたとき、一緒に練習した興奮を「彼女との練習ですごくモチベーションが高まりました。」と話します。我々の滞在中、彼女には南イリノイ大学から、スカラーシップ受け入れの知らせが届きました。

サディリのプログラムを終了した子供たち全員が大学に進める訳ではありませんが、どんな人生になろうとも間違いなく役に立つ教育を受け、生きる術を学んでいます。このことに対して、誰もがリズに感謝しています。

今日、サディリ・オーバルは、その地域の恵まれない子供たちの天国であるだけでなく、アフリカテニスの発信地となっています。オデラ博士の夢は無限に広がります。「サディリは、物理的な大きさではない広がりを見せています。私が目指すところは、私たちのこの信念を、他のコミュニティーにも広めることです。キベラやウガンダのような地域に同様なシステムを造りたいと思います。サディリは、本当に小さな事から始まっても成功できることを証明してくれました。一生懸命になって、地域と協力して情熱を持ち続けた結果として得られた事柄には驚くばかりです。」

オデラ博士は、最近、フランス政府から、ケニヤの若者へのスポーツ振興のための地道な努力と教育への貢献を認められ、栄えある叙勲を受けました。

彼女は、こういった賞をいただけることは素敵なことであり、彼女のやってきていることが公になることが募金活動にも役に立つけれど、テニスを通じてどれだけタイトルや賞を取るかということではなく、どれだけの人の人生を救えるかということに価値を見いだしています。まさに希有の存在といえます。

【リズ・オデラ博士】PTRプロフェッショナル・インターナショナルクリニシャン・インタナショナルテスター。PTRケニヤ代表。

【筆者略歴】Greg Moran: コネチカット州ウィルトンにあるフォーシーズンズラケットクラブのテニスディレクターであり、著名なテニス雑誌に寄稿。また　テニスの楽しみ方　に関してテレビにも出演。プリンス・ナショナルエリートとカーディオテニス・ナショナルスピーカーズチームのメンバーでもある。著書に、ベストセラーの「Tennis Beyond Big Shots」と、近著の「Tennis Doubles Beyond Big Shots」がある。

【翻訳・監修】　**鈴木眞一**：　ｱﾄﾞ・ｲﾝ桜ﾃﾆｽｽｸｰﾙ(柏市)代表　/　ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ・ｸﾘﾆｼｬﾝ　&　ﾃｽﾀｰ　/　PTRﾃｽﾀｰ委員会国際委員　/　PTRﾏｽﾀｰﾌﾟﾛﾌｪｯｼｮﾅﾙ (2008) / PTRﾌﾟﾛﾌｪｯｼｮﾅﾙ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ｲﾔｰ (2001) / JPTRﾌﾟﾛ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ｲﾔｰ (1986)